“孤独”を取り込み、自由に生きる

岸 惠子
（作家・女優）

フランス人映画監督と結婚するため二四歳のときに渡仏した岸惠子。世界で輝く日本人女性のパイオニアだ。パリへ渡った当時は文化の違いに戸惑っていたが、やがて個性を尊重するフランスの慣習が、孤独の向こう側にある自由な心へのヒントになったという。フランスと日本を行き来する彼女に、ひとりを楽しむ術を語ってもらった。

両親と暮らした横浜の家を本拠として、一八年が過ぎようとしています。古く愛着のある実家を手入れしながら暮らしていると、様々な思い出が甦ります。

私自身、これまでの歩みをふと振り返ると、人生の岐路に立つときは、いつも瞬間即決・即行動で、〝今、この瞬間〟を大切に過ごしてきた日々の連続だったように思います。

大学受験を控えた高校生のとき、ささやかな好奇心と映画の魔法に魅せられて、偶然なのか必然だったのか映画の世界に招かれ、女優デビューをします。映画『君の名は』の大ヒットにより、押し寄せる群衆と叫び声のなか、その状況に馴染めず、私が私でなくなっていく閉塞感と孤独の中にいました。

壊れていく寸前の私を救ってくれた人、あたたかく爽やかな風のごとく現れた人が、後に夫となる映画監督のイヴ・シァンピでした。

彼は、一人の女性として、あるがままの私に愛情を注ぎ、知性や教養、優しい人格で私を包んでくれました。一年間の交際の後、彼の待つパリへ行くこと、結婚を決めたのが二四歳のとき。まだ日本が異国への旅行を自由化していない時代、私は映画界を去り、祖国を捨て、両親とも離れ、「異国」のパリへ行くという決断をしたのです。

「卵を割らなければオムレツは作れない」というフランスの諺（ことわざ）のとおり、私は私の卵を割ったのでした。不安と寂しさに覆われた孤独や、その向こうにある自由を胸に、決して後悔しない人生を生きる覚悟をもったのは、このときからでした。その当時は、自分のお金で航空券を買うこともできず、送金も不可能、プロペラの飛行機で四八時間かけてパリへと向かった時代です。現在の日本では、おそらく想像できないほどの過去に聞こえると思います。

パリを拠点として生活、フランス語を学び、仕事は日本を中心に、何度もパリと東京を往復した日々。その繰り返しの時間の中で、パリ・東京間の飛行機の中、その無国籍地帯こそが、私の故郷のように感じられることがいくどもありました。機内という閉ざされた空間であっても、何処の国でもない、何処にも所属していない空間と時間が心地よく、まるで自分が解けきったように、束縛されていない自由を感じていたのです。

パリの空気に身を引き締めて

日本もフランスもそれぞれに良いところ、素敵な慣習があります。言語表現は明確に異なっていて、議論、論争に勝つための強く、攻撃的にさえ感じられるヨーロッパの言語に対して、日本語は、とても優しく、たとえば、「悲しい」「侘（わび）しい」「切ない」「寂しい」……と感情表現が豊かで美しく、繊細で陰影もあります。私は、日本人として、日本語を誇りに思っています。

では、人々の暮らしや、社会状況はどうでしょうか。摩擦を恐れ、他人の目や評価を気にするあまりに起こりうる陰険な虐（いじ）めや過剰なストレス。孤独を嫌がり、老いや病を強調する報道。孤独であることをかわいそうと見下す精神。そして表面上は優しいけれど、自分の意志をもった、個性の強い人にとっては住みにくい国。これらも日本の姿、側面と言えると思います。

今もパリには家があり、娘家族もいますので、

この続きは本誌でどうぞ！